CEFRの考え方とこれからの英語教科書の在り方

金子 哲

1 はじめに

CEFR の考え方を踏まえると、英語教科書は今後どうあるべきだろう。現在の日本の英語教科書は一定の変更を迫られると思われるが、どのような方向へどのような改善が図られるべきなのだろうか。このレポートは、そうした問題意識から、英語教科書の編集者を対象にして行ったアンケートの結果を分析しながら、新しい英語教科書の方向性と具体的な改善のポイントを浮き彫りにしたいと考える。

2 教科書編集者はCEFRと英語教科書をどのように結び付けて考えているか

本レポートを作成するにあたって、英語教科書の編集者の意識を調査するためにアンケートを行った。アンケートの対象は、小学校と中学校の英語教科書・教材の作成に向けて仕事を進めている出版社の編集者 8 名である。教科書の編集作業がすでに始まっている時期であり、自社の情報を外部に出すことに抵抗感を持たれることが予想されるため、対象は筆者が所属する出版社 1 社のみとした。対象者 8 名の年齢は、60 歳代 1 名、40 歳代 4 名、30 歳代 2 名、20 歳代 1 名である。

アンケートの実施時期は 2016 年 12 月。文部科学省の教育課程審議会で新しい学習指導要領についての議論が行われている段階である。新学習指導要領は 2017 年 3 月に告示される予定なので、その内容がわからない段階でのアンケートにはなかなか回答しづらいところだろうが、各編集者には「現在の自分の意識」ということで回答してもらった。

アンケートの内容は以下の通りである。

2.1 アンケートの内容

Q1 CEFR の CAN-DO リストの内容をご存知ですか。

① 知っている。 ② 多少知っている。 ③ ほとんど知らない。
④ まったく知らない。 ⑤ これから勉強しようと思っている。
⑥ あまり興味がない。

Q2 【資料 1】は CEFR の CAN-DO リストです。ここでは基礎段階の A1 と A2 に関

する記述だけに限って示しました。現在の日本の英語教育や英語教科書の在り方から見て、学ぶべき点があると思いますか。

① あると思う。　② それほどあると思わない。　③ なんとも言えない。
④ わからない。

Q3 【資料 1】のような CEFR の CAN-DO リストの考え方を踏まえると、日本の英語教育や英語教科書に改善の余地があると思いますか。

① 大いにあると思う。　② 多少あると思う。　③ ほとんど関係ないと思う。
④ なんとも言えない。　⑤ わからない。

Q4 新しい学習指導要領では、英語科において指標形式（CAN-DO 形式）の目標を示すことが検討されています。【資料 2】は、審議会のまとめで報告された指標形式の目標のたたき台です。CEFR の CAN-DO リストを参考にして作られたものですが、CEFR の考え方を踏まえていると思いますか。

① 踏まえていると思う。
② ある程度踏まえているが、日本の英語教育の現実を考慮している。
③ 踏まえていると言えるが、大きな違いがあると思う。
④ なんとも言えない。　⑤ わからない。

Q5 【資料 2】のような指標形式の目標が学習指導要領で示されると、英語教科書の内容は変わると思いますか。

① 大きく変わると思う。　② 多少変わると思う。　③それほど変わらないと思う。
③ 指標形式の目標が最終的にどうなるかわからないので答えられない。
⑤ なんとも言えない。

Q6 CEFR の背景には「多様な言語を学ぶことを通して、言語や文化に対する柔軟な姿勢を育む」という複言語主義の思想があります。今回の文科省の審議会においても、英語と国語という複数の言語の学習を連携させることの必要性が議論されました。英語と国語の学習の連携を進めるべきだと思いますか。

① 積極的に連携を進めるべき。　② 無理のない範囲で連携できればよい。
② あまり考える必要はない。　④ なんとも言えない。　⑤ わからない。

なお、アンケートの設問にはコメント欄を設けて、各自の自由記述を促した。また、設問にある【資料 1】は CEFR の自己評価表であり、【資料 2】は 2016 年 12 月時点で文部科学省が示している「『外国語』等における小・中・高等学校を通じた国の指標形式の目標（イメージ）たたき台」（以下「指標形式の目標案」とする）である。ただし、【資料 1】【資料 2】とも、小学校と中学校の英語教科書（A2 レベル以下）の編集者をアンケートの対象としたため、A2 レベル以下の CAN-DO リストの記述を示すのにとどめた。

2.2 アンケートの結果

アンケートの結果を集計すると以下のようになった。

Q1 CEFR の CAN-DO リストの内容を知っているか。

① 知っている。 2 名

② 多少知っている。 5 名

③ ほとんど知らない。 1 名

Q2 CEFR の CAN-DO リストから学ぶべき点はあるか。

① あると思う。 8 名

Q3 CEFR の考え方を踏まえると日本の英語教育や英語教科書は改善の余地があると思うか。

① 大いにあると思う。 3 名

② 多少あると思う。 3 名

③ なんとも言えない。 2 名

Q4 文科省の「指標形式の目標案」は CEFR の考え方を踏まえていると思うか。

② ある程度踏まえているが，日本の英語教育の現実を考慮している。 4 名

③ 踏まえていると言えるが，大きな違いがあると思う。 3 名

④ なんとも言えない。 1 名

Q5 指標形式の目標が学習指導要領に示されると、教科書の内容は変わると思うか。

① 大きく変わると思う。 2 名

② 多少変わると思う。 2 名

③ それほど変わらないと思う。 1 名

⑤ なんとも言えない。 3 名

Q6 英語と国語の学習の連携を進めるべきだと思うか。

① 積極的に連携を進めるべき。 1 名

② 無理のない範囲で連携できればよい。 6 名

③ なんとも言えない。 1 名

2.3 アンケートの分析

2.3.1 Q1～Q3 の回答について

Q1～Q3 は理念的な問題や将来的なビジョンとして、編集者が CEFR の考え方と英語教科書をどう結び付けて考えているかを問う設問だが、Q2 の「CEFR の CAN-DO リストから学ぶべき点はあるか。」という設問に対して、全員が「あると思う。」と回答している。どのような点を学ぶべきだと思っているのだろう。コメント欄には次のような記述がある。

① 今後日本版 CAN-DO リストが絶対評価のよりどころになるだろう。

② 現状の英語教育の中で、文法・文型と語彙の習得に時間をかけすぎていること（その割に定着していない）、4 技能のうち Reading に偏重しすぎていることなどを改善する方法として学ぶことができる。

③ 外国語の学習の目的を実生活での言語使用ということに設定する場合、大いに学ぶべきだろう。

④ 言語材料をそれ単体で扱うのではなく、それらが使われる場面と結び付けて扱うという考え方は、「知っていても使えない」日本人がたくさんいる現状からみて学ぶべきだと思う。

Q3 の「日本の英語教育や英語教科書は改善の余地があると思うか。」という設問には、「大いにあると思う。」「多少あると思う。」と回答したのが 6 名だが、「なんとも言えない。」という回答も 2 名いる。「改善の余地がある」とする編集者はどんな点を改善すべきだと思っているかを自由記述から探ってみる。

① よりいっそう言語活動中心の教科書にする必要がある。

② 文法・文型の理解を積み上げないと英語はできるようにならないという思い込みから抜け出す必要がある。

③ 評価の在り方で改善の余地があると思う。

この中で①の「言語活動中心の教科書」は複数の編集者の意見である。CEFR の考え方を踏まえたこれからの教科書の在り方として、ある程度共通する方向性だと言えるだろう。

2.3.2 Q4～Q5 の回答について

Q4～Q5 は，現実的な問題として新版教科書をどう考えるかを問うている。文科省が提示している指標形式の目標案と CEFR の CAN-DO リストの関係をどう見るかというのが Q4 の設問だが、ここで特筆されるのは「踏まえていると思うが，大きな違いがあると思う。」という回答が 3 名あったことである。正直に言うと，ここでは「ある程度踏まえているが，日本の英語教育の現実を考慮している。」という選択肢に回答が集中するのではないかと予想していた。実際この選択肢を選んだ編集者が 4 名でいちばん多かったのだが、「大きな違いがあると思う。」という回答が同じ程度あったのには少し驚いた。では、何を指して「大きな違い」と言っているのだろう。

① 文科省の指標形式の目標案は、「何ができるか」ということについての具体性が薄まっていると思う。

② CEFR のものはあくまでも自己評価表であるのに対して、文科省のものは到達目標と

して示されているため、評定（成績）につながる可能性が高い。

③ CEFR の考え方は一人一人の違いを前提にしている。結局は「みんな同じ」ことをよしとするこの国の価値観と根本がずれていると思う。

②は複数の編集者が指摘している。「日本の場合はすぐに評定（点数）をどうするかの方向に行く」という意見もあり、それが③の「『みんな同じ』ことをよしとするこの国の価値観」といった辛辣な見方につながっているように思う。

Q5 の「指標形式の目標が学習指導要領に示されると、教科書の内容は変わると思うか。」という設問に対しては、「大きく変わると思う。」「多少変わると思う。」という回答が 4 名、「なんとも言えない。」が 3 名、「それほど変わらないと思う。」が 1 名。Q3 に比べると、現実の選択としては「なんとも言えない。」や「それほど変わらないと思う。」という慎重な回答が増えている。自由記述を見てみよう。

① 言語活動の部分が手厚くなる、よりコミュニカティブになる、オーセンティックな教材を扱うようになるなど、変わらざるをえない部分が出てくるだろう。

② 教科書は User 視点が重要なので、現場での浸透状況を見守る必要がある。

③ 「大きく変わる」のが理想だろうが、結果的には「多少変わった」程度になるのでは。

④ 見せ方は工夫すると思うが、中身はあまり変わらないのではないか。

①を除いては慎重な意見ばかりである。学習指導要領が旗を振っても果たして現場がどこまで受け入れるかと考えると躊躇してしまうというのが正直なところだろう。

2.3.3 Q6 の回答について

Q6 は英語と国語の連携という問題を取り立てて問うている。「英語と国語の学習の連携を進めるべきだと思うか。」という設問に対しては、「無理のない範囲で連携できればよい。」という回答が 6 名で，ほぼこの回答に集中した。Q4 の場合とは逆に、おおかたの編集者はこう答えるだろうと予想した通りの結果になった。

① 日本では複数言語を連携して教える方法は確立していないので、単純になんでも国語と連携させればよいという極端な考えに陥る人が出てきそうで怖い。

② 無理矢理感が出ては元も子もない。自然に納得できる形のものを見せられるとよい。

③ 近年の国語教育はコミュニケーションのための実践的スキルを重視しており、英語学習とかなり重なると感じる。小学校で担任が両教科を教えるスタイルが確立すれば、英語と国語の連携は比較的わかりやすい形で実現できるのではないかと思う。

以上のような自由記述があるが、具体的なイメージが持てないというのが正直なところだろう。また、無理に連携させようとするのは危険だという編集者の感覚があるようだ。

3 これからの英語教科書の方向性と改善のポイント

3.1 言語活動重視の教科書

ここからはアンケートの分析を踏まえて、これからの英語教科書の方向性と改善のポイントを考えていきたい。

2.3.1 の分析で見たように、これからの英語教科書の方向性として挙げられるのは「言語活動重視の教科書」ということである。ただ言語活動の重視は従来から求められていたはずである。それをさらに重視するとは、具体的にどうすることだろう。

現行の学習指導要領では「習得」と「活用」が強調されている。英語教育の場合、大まかに言えば、文型・文法や語彙などの意味や使い方を理解して練習する段階が「習得」であり、コミュニケーションを図るために「聞く」「話す」「読む」「書く」活動をする段階が「活用」に当たると言えるだろう。習得と活用の学習をバランスよく行うことが学習指導要領で求められているわけだが、ともすると習得が基本であり、活用は応用発展であるととらえがちである。そうなると、いきおい習得は必須だが、活用は余裕があれば行う「付け足し」という感覚になってしまう。その要因の１つとして、教科書の単元構成が指導者や学習者にそう感じさせてしまうという点があるのではないか。「習得に活用が付いている」のではなく、「習得と活用は一連のものである」「習得はあくまでの活用の前段階である」といった位置付けが伝わるような単元構成にする必要がある。同時に、言語活動重視ということでわかりやすいのは言語活動の場面を増やすことである。言語活動の手立てを丁寧に示すことも必要になる。これはいきおい教科書のページを増やすことにつながる。

言語活動の位置付けや分量と同時に考えなければならないのは、言語活動の質の問題だろう。言語活動と一口に言ってもその質はばらばらで、文型や文法事項の練習と大差ないものもある。学習者が、自分が習得した言語材料のレパートリーの中から、課題に応じて使える材料を引き出して使うような言語活動の場を設けることが必要である。そうした経験を通して、学習者は言語材料が自分のものになったという実感が持てるだろう。

もう一つ考えたいのは, 学習者に言語活動における課題解決のリアリティを持たせることである。2.3.1 で示した編集者の意見に、CEFR の CAN-DO リストは「外国語の学習の目的を実生活での言語使用ということに設定する場合、大いに学ぶべきだろう」という記述があったが、実生活での言語使用を想定することは、課題解決のリアリティを持たせるうえで重要な要素になる。そのためには、CEFR の CAN-DO リストに見られる、アナウンス、広告、メニュー、ポスター、カタログといった、いわゆるオーセンティックな（本物の，加工されていない）教材を取り入れることを考えるべきだろう。

最後に考慮したい点は、CEFR の考え方にある、言語活動における課題解決のためにはコミュニケーション能力とともに一般的能力や方略が必要になるという点である。学習者が一般的能力や方略を駆使するような言語活動を工夫する必要がある。

3.2　Reading の言語活動の在り方と問題

ここから CEFR の CAN-DO リストの具体的な記述に注目して、言語活動の在り方と問題点を考えてみたい。まず注目したいのは、CEFR の CAN-DO リストにおける Reading の

A1 レベルと A2 レベルの記述である。

A2	ごく短い簡単なテクストなら理解できる。 広告や内容紹介のパンフレット、メニュー、予定表のようなものの中から日常の単純な具体的に予測がつく情報を取り出せる。 簡単で個人的な手紙は理解できる。
A1	例えば、掲示やポスター、カタログの中のよく知っている名前，単語，単純な文を理解できる。

3.2.1　オーセンティックな教材の必要性

CEFR では A1 および A2 レベルの Reading の主要な材料として、広告やパンフレット、ポスターやカタログといったオーセンティックな教材が想定されている。3.1 で述べたように、これからの教科書の在り方として、実生活の言語使用という場面を作り、学習者が課題解決のリアリティを感じることができるようにするために、オーセンティックな教材を取り入れることは大いに考えるべきことである。CAN-DO リストでは「必要な情報を取り出す」ことも重視されている。必要な情報を取り出すためには、テクストの内容を大づかみにして，その中のどの部分にその情報が書かれているかを見極め、そこに焦点を当てて内容を理解するといった読み方が求められる。これは逐語訳で内容を理解する読み方とは異なるものだが、こうした読み方にふさわしいのがオーセンティックな教材だろう。実生活で目にするものなので「具体的に予測がつく」情報であることが多いし、逐語訳で読もうとしても読めないので、いきおい内容を大づかみにして必要な情報に焦点を当てる読み方をせざるをえない。

教材と同時に Reading の課題の在り方も、必要な情報を取り出す力を育てるうえで工夫しなければならない点だろう。テクストが取り上げている話題について自分が持っている知識を振り返ったり、それをもとにテクストの内容を予想したり、未知の語句があっても文脈などから意味を類推したりするなど、2.1 で触れた Reading の「方略」が身に付くような課題を工夫する必要がある。

さらに、学習者の力の育成を考えるなら、同じ課題で複数のテクストを読むことが必要になるだろう。たいていの場合、教科書の Reading の教材には、正誤を問う、質問に答えるといった複数の課題が設けられている。しかし、これは学習者にあくまでも正確な読みを求める考え方に囚われているのではないか。1 つのテクストに複数の課題を設けるのではなく、「必要な情報を取り出す」という 1 つの課題に対して複数のテクストを用意するのが望ましい在り方ではないだろうか。

3.2.2　教科書のページ数を増やす

1 つの課題に複数のテクストを用意するとなると、教科書のページ数を増やすことがどう

しても必要になる。これは 3.1 の言語活動重視の方向性で述べたことだが、Reading 教材の在り方を考えるうえで、もう一度取り上げてみたい。

教科書を論じる際に以前からあるのが、教科書はその教科のエッセンスであり、あまり多くの情報を盛り込むべきではないという考え方である。「精選」とか「厳選」という言葉が教科書編集のキーワードだった時代もある。しかし、その結果、日本の教科書は外国の教科書に比べてページ数がぐっと少ないものになっている。これが日本の英語教育の 1 つの足かせになっていると思う。

現行の中学校英語教科書は外国の教科書に比べて、英語の分量が非常に少ない。そして、新出の文型・文法事項、語句を提示するのが教科書の主な役割になっている。少ない分量の英語の中に、未知の言語材料が数多く出てくるので、Reading の教材としては相応しくない。知っている語句を手掛かりに内容を類推するには未知の言語材料が多すぎて、逐語訳で内容を理解するしかなくなってしまう。これは、英語小委員会が以前にまとめた書籍『提言日本の英語教育—ガラパゴスからの脱出』でも触れているところである。現行の教科書のページ数は、「活用」ではなく「習得」重視の時代のものであり、英語は逐語訳でよしとした時代のものであると言うことができる。

とはいっても、現実問題として教科書ページ数を大幅に増やすのには強い抵抗がある。では、どうすべきだろう。考えられる 1 つの方法は、教科書以外に Reading の教材を数多く用意することである。紙に印刷した教材でも、最近注目を集めるデジタル教材でもよい。教科書を主たる教材にしながら、周辺の教材群を今よりももっと充実させて、教科書と教材が一体となったシステムを作るということである。これからの時代は、教科書単体ではなく、この「教科書 - 教材システム」を構想することが強く求められていくような気がする。

3.3　Speaking（やり取り）の言語活動の在り方と問題点

Reading に続いて Speaking（やり取り）の言語活動の在り方と問題点を取り上げてみたい。CEFR の CAN-DO リストは，従来ひとくくりだった Speaking を「やり取り」と「発表」に分けており、指標形式の目標案もその考え方を踏まえている。注目したいのは、CEFR の Speaking（やり取り）の A1 レベルの記述である。

A1	相手がゆっくり話し、繰り返したり、言い換えたりしてくれて、また自分が言いたいことを表現するのに助け船を出してくれるなら、簡単なやり取りをすることができる。 直接必要なことやごく身近な話題についての簡単な質問なら、聞いたり答えたりできる。

CEFR の A1 レベルでは、Speaking（やり取り）において主に学習者が自分よりも熟達した言語の使用者とやり取りすることを想定している。「ゆっくり話し、繰り返したり、言

い換えたりしてくれて、また自分が言いたいことを表現するのに助け船を出してくれる」相手は、A1 レベルの学習者よりも相当熟達した言語使用者でなければならない。たしかに実生活で A1 レベルの学習者がどんな相手と英語でやり取りする場面があるかと考えれば、自然な発想だと言える。しかし、日本の学校教育の場合はどうだろう。生徒にとって熟達した言語使用者となると、まず教師や ALT ということになるが、少なくとも現行の英語教科書にある Speaking の言語活動は、もっぱら生徒同士のやり取りを促すもので、教師や ALT との対話を促すものはほとんどない。実際、授業のウォームアップの場面などで教師と生徒との対話が行われているし、ALT による面接テストなども行われているが、現在のところ教師や ALT との対話が授業における中心的な言語活動として位置付けられているとは言えない。今後の改善のポイントの１つと考えてよいのではないか。ALT の面接テストがあるといっても、日常的に経験していないことを評価の場面だけで行うというのは適切ではないだろう。教師や ALT との対話を授業の中心的な活動として位置付ける，そのためには教科書の言語活動に生徒同士のペアワークやグループワークだけでなく、教師や ALT との対話を促す言語活動を取り入れたらよいと思う。

とはいっても、対話とは基本的に１対１のものなので，教師や ALT が生徒一人一人と個別に対話する時間を作るのは現実には難しいという意見が出てくるだろう。それを解消するためには、授業の形態を工夫する必要がある。生徒を少人数にグループ分けして、それぞれ異なる課題に取り組ませる中で、１つのグループは教師や ALT の対話を行うといった授業形態を取り入れれば、一人一人と個別に対話する場面を作り出すことができるだろう。

3.4　CEFR の複言語主義に学ぶ

CEFR には複言語主義という思想がある。これは単純に複数の外国語を学ぶというのではなく、複数の言語に触れることで人格を豊かにし、アイデンティティ感覚を発展させるという考え方である。教育課程審議会の英語と国語の連携の提案の背景に、CEFR の複言語主義の考え方があるのではないかと考え、アンケートの Q6 の設問で水を向けてみたのだが、これについて教科書編集者からの目覚ましい反応は得られなかった。しかし、個人的な考えとしては、英語と国語の連携によって、CEFR の複言語主義のねらいである「豊かな人格とアイデンティティの確立」を目指すことは可能だと思う。そのヒントになると思う例を挙げてみたい。

それは、現行の小学校国語教科書（光村図書）6 年に収録されているドナルド・キーン氏の「かなえられた願い―日本人になること」という文章である。広く知られているように、東日本大震災の後、キーン氏は日本が困難な時を迎えたからこそこの国で暮らしたいと考えて日本の国籍を取得した。この文章は小学校 6 年生に向けてそのときの思いなどをつづったものだが、その中に次のページに示すような「日本のみなさんへのメッセージ」がある。まさに、複数の言語の学習を通して、豊かな人格を形成しアイデンティティを確立することを学習者に促している。

日本のみなさんは、もっと自国のことを知るべきです。よい日本文学を読むこと、そしてよい日本語を書くこと。日本の言語文化には、それだけの価値があります。それから、少なくとも一つの外国語を学ぶべきでしょう。　自分の国を知るためには、外国のことを知らなければならない。自分が常識だと思うことも、他の国では常識ではないかもしれない。日本語にあって外国語にない言葉や、日本語になくて、外国語にある言葉がある。それを知ることは日本をより深く知ることになるとともに、世界人になることでもあるのです。

たとえば中学校 3 年などで、このメッセージを実感できるような題材や言語活動を構想することができないだろうか。これまでの英語の学習を振り返って、自分が常識だと思うことが他の国では常識ではないと気づいたことはないか、日本語にあって英語にない言葉や、日本語になくて英語にある言葉はどんなものがあるだろう、と問いかけて学習者に考えを深めてもらうといったことが考えられると思う。

4　まとめ

以上、CEFR の考え方を踏まえてこれからの英語教科書の在り方について考えてきたが、まとめとして、浮かび上がってきたポイントを整理してみたい。

① 言語活動を重視した教科書―言語活動の位置付け、分量、質、課題の工夫
② オーセンティックな教材の必要性―実生活との関わり、必要な情報を取り出す力をつける、「方略」を身に付ける
③ 教科書のページ数の増加―周辺教材との一体化も視野に入れる
④ 教師や ALT との対話の重視―少人数指導など授業形態を工夫する
⑤ 豊かな人格とアイデンティティの確立につながる英語と国語の連携

こうした方向性を持ちながら、現場の先生がたの意見を広く聞きつつ英語教科書の改善を図っていくことが教科書編集者に求められていると考える。

参考文献

小池生夫. (2013).　『提言　日本の英語教育　ガラパゴスからの脱出』　光村図書.
ドナルド・キーン. (2015).　「かなえられた願い―日本人になること」（平成 27 年度版国語 6 年「創造」所収）　光村図書.